

〔実践研究〕

アダプテッド・スポーツを用いた支援サポーター養成プログラムの検討：
エイジズム，エンパワメント，及びソーシャルワークの視点から

河野 喬¹・森木 吾郎¹・房野 真也¹・加地 信幸¹・山崎 昌廣¹

Development of a Supporter Training Program based on Adapted sports for the elderly: From the perspective of ageism, empowerment, and social work

Takashi KAWANO, Goro MORIKI, Shinya BONO, Nobuyuki KAJI and Masahiro YAMASAKI

Abstract

The purpose of this study was to evaluate the change in ageism of students who participated in the elderly adapted sport (eAdS) program. Fourteen students (eight men and six women, mean age 20.5 ± 0.78 years) participated in this program. The changes in students' ageism were assessed by the Semantic Differential (SD) Method, The Facts on Aging Quiz (FAQs), and The Fraboni Scale of Ageism (FSA). Results showed that the SD score was significantly more positive after participation than before ($p < .01$). FAQ scores also improved significantly ($p < .05$). FSA scores decreased significantly only for the sub-items "Separation and avoidance" ($p < .05$). Therefore, it was indicated that the Ageism of the student was reduced by the eAdS program.

Keywords:

adapted sports (アダプテッド・スポーツ), *supporter training program* (支援サポーター養成プログラム), *ageism* (エイジズム), *empowerment perspective* (エンパワメント), *societal implementation* (社会実装)

1. 背景

当初，高齢者とくに要介護高齢者を対象として提唱されたのが「地域包括ケアシステム」の構想であった（厚生労働省，2003）。その後，すべての人が世代や背景を問わず，安心して暮らし続けられるまちづくりを指向する「全世代・全対象型地域包括支援」への拡大・深化（厚生労働省，2015）を経て，現在は，支援する側・支援される側を固定しない，相互に多様性（diversity）を認

め合う地域共生社会の実現が政策目標となっている（厚生労働省，2017）。この地域共生社会の構想において，社会福祉士ないしソーシャルワーカーは，分野横断的な課題への対応，及び社会資源開発の役割を担うことが求められているが（厚生労働省，2018），具体的な役割がどのようなものか明確ではない。理念上は，利用者主体，自立支援，及び自己決定の重要性が示されているものの，高齢者福祉分野におけるソーシャルワーク実践の多くは，高齢者の抱える問題，脆弱性に対す

¹ 広島文化学園大学 人間健康学部 スポーツ健康福祉学科
(Department of Sports, Health and Well-being, Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

る支援を論じるものが多い（新名・中村, 2018）。これは、日本社会における高齢者の生活のしづらさを示すものであり、高齢者に対する否定的なイメージ、エイジズムが未だ根強く存在することを意味している。

エイジズムは、年齢に基づくステレオタイプ、偏見、及び差別を意味し、健康と幸福に大きなリスクをもたらすことが知られている（Lamont et al., 2015）。世界保健機関（WHO）は、エイジズムの低減が人間の健康改善の重点目標として位置づけており（WHO, 2015）、現在は、大学生を含めた若年成人の年代が、エイジズム低減のための教育介入が特に効果的であることが明らかとなってきた（Burnes et al., 2019）。そのため、今後はますます高齢者の脆弱性への対処だけでなく、強み、主体性、及び潜在可能性といった肯定的側面への着目が求められる。すなわち対人援助の概念であるストレングス（小松, 1996, Rapp, 1998）及びエンパワメント（Solomon, 1976；小松, 1995）を重視した教育研究の社会実装化が期待される。

筆者たちの所属機関（広島文化学園大学）では、平成28年度に「地域共生のための対人援助システムの構築と効果に関する検証」をテーマとする研究計画が、文部科学省私立大学研究ブランディング事業に採択された（4年継続課題）。筆者たちは、その研究部門のひとつである「スポーツ・健康福祉研究部門」に所属し、「障害者・高齢者に対する健康福祉支援：アダプテッド・スポーツモデルの構築」の研究に従事している。この研究プロジェクトには、対象者（障害者、高齢者）に対する健康増進を行うことに加えて、支援の担い手を募り育て、支援の輪を広げることで、地域共生社会の持続可能性を高めることが含まれている。単に支援のプログラム作成に留まらず、プログラムを展開できるサポーター養成を行うことから、地域を基盤としたアクティブ・ラーニングといえよう。

そこで、本研究では、支援サポーター養成のプログラム化を行うことを目的に、「高齢者アダプテッド・スポーツ教室」（以下、eAdS教室）に参

加した学生について、参加前後の高齢者イメージ、知識、エイジズム、及び就職意図の変化を分析した。

2. 方法

(1) 対象者

対象者は、eAdS教室への協力を申し出た福祉を専攻する学生14名（男性：8名、女性：6名、平均年齢20.5歳 ± 0.78年）（以下、支援サポーター）であった。支援サポーターは、2017年11月、2018年3月、及び2018年4月に実施したeAdS教室にそれぞれ参加した。支援サポーターの特徴を明らかにするため、人間健康学部1年生118名（以下、大学生）を対象に入学1ヵ月後に行った調査結果を比較対象とした。

(2) 高齢者アダプテッド・スポーツ教室の内容

当eAdS教室の内容は、2016年の高齢者フライングディスク教室（Kawano et al. 2018）、2017年の高齢者と大学生によるボッチャ交流会（河野他, 2018）を基に検討した。これらの分析結果を基に、高齢者の心身機能、健康状態の差に対応できる種目として、ボッチャを選択した。

ボッチャ（Boccia）は、運動能力の高低、障害の軽重に関わらず、誰でも安心して屋内で楽しむことができるヨーロッパ生まれのアダプテッド・スポーツ（AdS）である。重度の脳性麻痺者、四肢に重度の運動機能障害がある人のために屋内競技として考案された背景をもつため、健康な人から要支援・要介護状態にある高齢者まで、誰でも行うことができる種目である。eAdS教室は、週1回の頻度で4週間を1開催として実施し、全3回を行った。各回、別々の高齢者を対象とし、及び支援サポーターの協力を得た。

(3) 支援サポーターの役割

支援サポーターの役割は、学生が有する高齢者との交流経験、知識、及びコミュニケーション技術に差があるため、簡易で定型化された役割に整

理した。まず、事前に目的、及び内容を示し、接遇・マナー、使用する質問紙の記入方法、機器の使用法、及びポッチャのルールについて指導した。eAdS教室開催日には、学生支援サポーターが、参加高齢者と円滑かつ負担感少なく関わるができるように、手順を示し、フォローを行いながら実施した。

(4) 測定項目

1) 基本調査

オリエンテーションのはじめに、年齢、性別、高齢者との関わりについて回答を求めた。高齢者との関わりは、同居経験について「現在、同居している」、「過去に、同居していた」、「同居経験したことはない」の3項目から回答を求めた。

2) 高齢者に対するイメージ

Semantic Differential Method (以下、SD法)は、「冷たい-暖かい」など反対語の対からなる評価尺度を複数用いて対象の評価を行い、ある事象の一般的な意味を量るための測定法である。本研究では、青少年の老人イメージの比較を行った鄭他(2000)の17対の形容詞を採用し、7件法によって評価した。中点である4を「どちらともいえない」とし、両極である1と7を「非常にそう思う」、2と6を「そう思う」、3と5を「ややそう思う」とし、オリエンテーション、及び最終日終了後の2度、回答を求めた。

3) 高齢者に対する知識

高齢者に対する知識を確認するために、The Facts on Aging Quiz (以下、FAQ)を用いた。FAQは、Palmoreによって作成された高齢者に関する知識を測る尺度である(Palmore. 1977)。高齢者やエイジングに関する25の設問で構成されており、その正誤を問うものである。本研究では、前田(1978)による日本語翻訳版を用い、オリエンテーション、及び最終日終了後の2度、回答を求めた。

4) エイジズム

高齢者に対する否定的態度の強弱を確認するため、日本語版Fraboniエイジズム尺度短縮版(以下、FSA)(原田他, 2004)を用いた。FSAは、全14項目からなるエイジズムを図るための尺度である。下位項目「嫌悪・差別」(6項目)、「回避」(5項目)、「誹謗」(3項目)に分類することができる。回答は、そう思う=5点、まあそう思う=4点、どちらともいえない=3点、あまりそう思わない=2点、そう思わない=1点、の5件法で求め、Q.12のみ逆転項目として扱った(得点範囲:14~70点)。得点が高いほどエイジズムは高い、すなわち高齢者への否定的態度が強いと解することができる。オリエンテーション、及び最終日終了後の2度、回答を求めた。

5) 高齢者支援分野への就職意図

支援サポーターとしての経験が、高齢者支援分野への就職意図に及ぼす影響を確認するため、「今現在、あなたは将来、高齢者を対象とする医療、福祉現場で働きたいと思えますか。」の設問に対して、非常にそう思う=7点、そう思う=6点、ややそう思う=5点、どちらともいえない=4点、あまりそう思わない=3点、そう思わない=2点、全くそう思わない=1点、の7件法で、オリエンテーション、及び最終日終了後の2度、回答を求めた。

(5) 統計的処理

SD法によるイメージ、FAQ、FSA、就職意図については、先行研究に基づきスコアリングを行い、平均値及び標準偏差を求めた。大学生、支援サポーター(PRE)、及び支援サポーター(POST)の比較は、一要因分散分析を行い、多重比較にはBonterroui法を用いた。eAdS教室実施前後の比較は、paired t-testを行った。有意水準はそれぞれ5%未満とし、解析にはSPSS version24.0を使用した。

(6) 倫理的配慮

本研究は、広島文化学園大学研究倫理規定、及

Table 1. 大学生と支援サポーター (PRE) の高齢者観 (高齢者に対するイメージ, 就職意図, 知識, 及び否定的態度)

	大学生 (N=118)		支援サポーター (N=14)	
性別				
男性	100	(84.7%)	8	(57.1%)
女性	18	(15.3%)	6	(42.9%)
高齢者との同居経験				
現在, 同居中	16	(13.6%)	1	(7.1%)
過去に, 同居	31	(26.3%)	1	(7.1%)
同居経験なし	71	(60.2%)	12	(85.7%)
高齢者に対するイメージ (SD) (range, 1-7)				
冷たい-温かい	5.07	± 1.31	5.21	± 0.89
悲しい-うれしい	4.32	± 1.09	4.29	± 0.73
正しくない-正しい	4.38	± 1.28	4.71	± 0.91
ひどい-すばらしい	4.58	± 1.24	5.14	± 1.03
みにくい-美しい	4.31	± 1.20	4.36	± 1.15
話にくい-話しやすい	4.96	± 1.43	5.93	± 0.73***
汚い-きれいな	4.44	± 1.21	3.93	± 1.07
病気がちな-元気な	4.04	± 1.36	4.29	± 1.68
邪魔をする-手伝ってくれる	4.76	± 1.27	5.14	± 0.77
悪い-良い	4.87	± 1.17	5.07	± 1.21
だらしない-きちんとした	4.74	± 1.22	5.07	± 1.07
暇そう-忙しそう	3.81	± 1.56	3.29	± 1.54
愚かな-賢い	4.62	± 1.21	5.07	± 0.92
遅い-速い	3.64	± 1.44	2.93	± 1.44
小さい-大きい	3.67	± 1.49	2.71	± 0.99*
弱い-強い	3.92	± 1.51	3.43	± 1.34
鈍い-鋭い	3.86	± 1.38	3.50	± 1.22
就職意図 (range, 1-7)	3.81	± 1.59	5.64	± 1.28***
エイジング・クイズ得点 (FAQ) (range, 0-25)	12.25	± 2.28	14.14	± 3.25**
エイジズム (FSA)				
嫌悪差別 (range, 6-30)	15.09	± 4.98	10.07	± 2.81***
回避 (range, 5-25)	13.64	± 3.82	8.93	± 2.87***
誹謗 (range, 3-15)	8.85	± 2.42	7.57	± 2.21

Number (%), Mean ± SD, *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$.

Table 2. 支援サポーターの就職意図, 及びエイジング・クイズ得点の比較 (N=14)

	PRE	POST
就職意図 (range, 1-7)	5.64 ± 1.28	5.71 ± 1.33
エイジング・クイズ得点 (FAQ) (range, 0-25)	14.14 ± 3.25	16.21 ± 1.93*

Mean ± SD, *: $p < .05$.

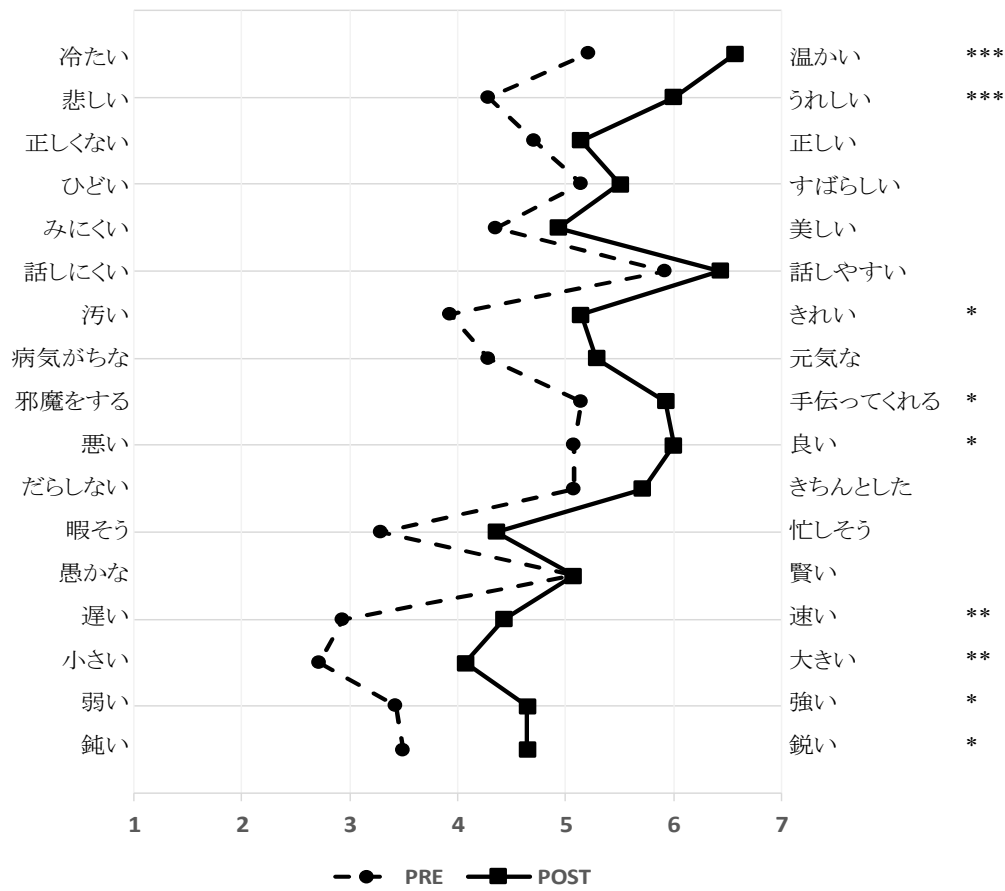


Figure 1. 高齢者アダプテッド・スポーツ教室参加後のイメージの変化 (N=14)
* : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$.

び日本社会福祉学会研究倫理規程に則って計画し、研究倫理審査会の承認を得た。(承認番号：HS-2018002)

3. 結果

(1) 大学生と支援サポーターの特徴

eAdS教室参加前の支援サポーター (PRE) と、大学生の高齢者観を比較したものをTable 1に示す。高齢者との同居歴のない者の比率は、支援サポーターの方が高かった。高齢者イメージを示す17対の形容詞の得点は、高いほどポジティブなイメージを抱いていると解釈できる。17対のうち、大学生と支援サポーターの間に有意差が見られたのは2対であり、「話しにくい-話しやすい」($p < .001$)は支援サポーターが高値であり、「小

さい-大きい」($p < .05$)は大学生が高値であった。

高齢者支援分野への就職を考えているかどうかを問う就職意図は、支援サポーター ($p < .001$)が有意に高値であった。高齢者に関する知識を問うFAQ得点もまた、支援サポーター ($p < .01$)が高かった。高齢者に対する否定的態度を示すFSA得点は、高値であるほど否定的態度が強いことを示すが、支援サポーターは嫌悪差別 ($p < .001$)、及び回避 ($p < .001$)が有意に低値であった。

(2) 支援サポーターのeAdS教室後の変化

eAdS教室に参加した高齢者の健康感は、実施前後で肯定的に変化した (Kawano et al., 2020)。その場で支援サポーターとして従事した学生たちのeAdS教室に参加する前 (PRE) と、参加した後 (POST) のイメージ得点を比較した結果を

Table 3. 高齢者アダプテッド・スポーツ教室前後のエイジズム得点比較 (N=14)

下位項目	質問項目	PRE	POST		
嫌悪差別	Q.4. 高齢者に会うと、時々目を合わせないようになってしまう	1.86 ± 0.66	1.50 ± 0.65		
	Q.5. 高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない	1.29 ± 0.61	1.14 ± 0.36		
	Q.6. 高齢者は、若い人の集まりに呼ばれた時には感謝すべきだ	2.07 ± 0.83	1.79 ± 1.12		
	Q.9. 高齢者には地域のスポーツ施設を使ってほしくない	1.36 ± 0.63	1.21 ± 0.43	8.57 ± 1.99	
	Q.10. ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない	1.86 ± 0.77	1.64 ± 0.84		
	Q.11. 高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ	1.64 ± 0.63	1.29 ± 0.47		
回避	Q.7. もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない	1.57 ± 0.65	1.14 ± 0.36 *		
	Q.8. 個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない	1.93 ± 0.92	1.29 ± 0.47 *		
	Q.12. a) 高齢者との付き合いは、結構楽しい	1.43 ± 0.51	8.93 ± 2.87	1.36 ± 0.50	7.00 ± 1.57 *
	Q.13. できれば、高齢者と一緒に住みたくない	2.36 ± 0.84	2.00 ± 0.78		
	Q.14. ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる	1.64 ± 0.74	1.21 ± 0.43		
誹謗	Q.1. 多くの高齢者は、けちでお金や物を貯めている	2.43 ± 0.94	2.00 ± 0.78		
	Q.2. 多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない	2.14 ± 0.77	7.57 ± 2.21	1.93 ± 0.83	6.07 ± 2.27
	Q.3. 多くの高齢者は、過去に生きている	3.00 ± 1.04	2.14 ± 1.10 *		

Mean ± SD, *: $p < .05$.

a) Q.12. のみ逆転項目として、そう思う = 1点、まあそう思う = 2点、どちらともいえない = 3点、あまりそう思わない = 4点、そう思わない = 5点とし、その他の質問項目は5点～1点を配点した。そのため、スコアが低いほどエイジズム視点が弱いことを示す。

Figure 1 に示す。形容詞17対のうち9対において、実施後の得点のほう有意に高値であった。特に、実施前は中点(4)を下回っていた「汚い-きれい」($p < .05$)、「遅い-速い」($p < .01$)、「小さい-大きい」($p < .01$)の形容詞対のイメージ得点が大幅に改善した。「冷たい-温かい」($p < .001$)、及び「悲しい-うれしい」($p < .001$)は、実施前が中点を上回っており、実施後更に有意な上昇を示した。

次に、就職意図とFAQ得点について、eAdS教室前後を比較したものをTable 2に示す。就職意

図のスコアに有意差は見られなかった一方、FAQ得点 ($p < .05$) が有意に上昇した。

FSA得点の前後比較では、下位項目「回避」($p < .05$) についてのみ、実施後のスコアが有意に低下した。併せて、17の質問項目のうち、「もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない」($p < .05$)、「個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない」($p < .05$)、及び「多くの高齢者は、過去に生きている」($p < .05$)の得点が有意に低下した。

(3) 大学生と支援サポーター eAdS教室前後のエイジズム傾向の比較

大学生, 支援サポーター (PRE), 及び支援サポーター (POST) を独立変数とし, FSA得点を従属変数とする一要因分散分析の結果, 嫌悪差別 ($F(2,143) = 17.99, p < .001$), 回避 ($F(2,143) = 29.17, p < .001$), 及び誹謗 ($F(2,143) = 9.53, p < .001$) に有意な主効果が認められた。多重比較の結果, 嫌悪差別と回避については, 大学生よりも支援サポーターのPREとPOSTの双方のエイジズム視点が有意に低値であることが示された。誹謗については, 大学生よりも, 支援サポーター (POST) のみ, エイジズム視点が有意に低値であることが示唆された。

4. 考察

(1) 高齢者イメージに及ぼすeAdS教室の影響

若者が抱く高齢者イメージと高齢者の交流経験の関係について, 先行研究では同居か否かの関連はなく, 幼少期に交流経験が豊富であったこと(藤原他, 2007), 会話する機会の頻度が多かったこと(大塚他, 1999)が影響すると指摘している。Table 1で示したとおり, 新入生, 及び支援サポーターは, いずれもその過半数が高齢者との同居を経験していない。支援サポーターは, 大学生と同程度の交流経験であっても, 話しやすさのイメージが良好であり, 交流の内容及び印象が良質であったことがうかがえる。高齢者支援分野に進む大学生に対しては, 好ましい交流機会を通じた, 肯定的な高齢者イメージへの更新が望ましい。対人援助専門職の養成課程の学生は, カリキュラムが進行するごとに, 高齢者の身体, 社会面の活動性に関するイメージが否定的に変化するとの報告(須藤, 2017)がある。その一方で, 人格や道徳的側面については肯定的に変化するとの指摘(小島他, 2017; 切明他, 2018)がある。若者にとって, 高齢者の精神面への印象は肯定的であり, 身体活動面への印象は否定的であることを示している。本研究では, 温かさや良さといった精神面だ

けでなく, 手伝ってくれる, 速い, 強いといった身体面, 及び活動面に関する項目得点が上昇した。アダプテッド・スポーツによって, 体力の高低や障害の有無を超えて, 高齢者の有する潜在可能性に触れる機会となったことが想像される。eAdS教室には, 若者が抱く高齢者に対する印象を肯定的なものに変える教育効果があるものと考ええる。

(2) エイジズムに及ぼすAdSの効果

エイジズムが及ぼす社会への弊害として, 若者を老いの現実から引き離し, 社会の高齢者に対する責任回避につながる危険性が指摘されている(堀・大谷, 1995)。対人援助の場面においては, 対人援助職のエイジズムが強いと, 高齢者に対する援助に支障をきたす恐れがあるとされている(吉田他, 2017)。若者の老化に対する心理的抵抗を大きくし, 高齢者を無力な存在と見做すエイジズムは, ソーシャル・インクルージョンとは真逆の方向性である。本研究の結果, FAQ得点が有意に向上し, 併せて, FSAの下位項目のうち回避が有意に低下したことは, 高齢者に対する知識が高まり, 関わりに対する心理的抵抗感が和らいだことを意味する。特に, eAdS教室単独の影響として, 誹謗の低減が確認されたことは, 世代間の分離を和らげるインクルーシブ効果を示唆するものと考ええる。

エイジズムは, ①老人, 老齡, 老化についての偏見的な態度, ②老人に対する差別的な習慣的行為, ③老人に対するステレオタイプを存続させる制度やポリシーといった3つの要素で構成されている(Butler, 1980)。エイジズムに対するソーシャルワーク・アプローチは, ストレングスモデル, 及びエンパワメントを基盤とする(Cox and Parsons, 1994)。ポッチャは, 誰でも楽しめるがパラリンピック公式種目であり, 競技型のAdSである。ルールや道具に工夫を施したポッチャは, 競技中の高齢者をエンパワメントするだけでなく, 支援サポーターの高齢者観をストレングスモデルに更新することが期待でき, ソーシャルワー

クとの親和性の高いAdS種目であると考ええる。

(3) 支援サポーター養成プログラムの要素

本研究の実施によって、支援サポーターであった学生たちの高齢者イメージ、及び高齢者理解が向上し、エイジズムが低減することが明らかとなった。但し、就職意図については、支援サポーターのスコアが高止まりしたため、キャリア支援としての効果は確認できなかった。そのため、福祉現場等で行われる高齢者とのアダプテッド・スポーツ交流を、安易に進路指導と結びつけるのではなく、社会教育、地域福祉、及びソーシャル・インクルージョンの観点から、地域共生社会づくりに向けたCommunity-Based Learning (CBL) として展開することが望ましい。そのため、支援サポーターが、個々の力量に左右されることなく、高齢者個々の強みを見出し、力を引き出す対人援助姿勢を体感できるプログラムとして、次の試案を作成した。

- 1) 【事前指導】 高齢者理解、支援内容に関するオリエンテーション
 - ① eAdS教室の目的、内容、支援サポーターの役割の学習、事前調査（基本調査、SD法、FAQ、FSA）
 - ② 対象高齢者の理解、地域・事業所の学習
 - ③ 健康指標、測定尺度、機器の学習と試行
 - ④ ボッチャのルール学習と試行
 - ⑤ 質疑応答
- 2) 【eAdS教室】 支援サポーターとしての役割の実施（高齢者との交流、コミュニケーション能力の開発を中心に）
 - ① 定型化された自己紹介
 - ② 高齢者ボッチャの支援（球の手渡し、採点）
 - ③ 健康指標の測定、質問紙調査の実行
 - ④ 調査終了後の参加者とのコミュニケーション「きんさいカフェ」
 - ⑤ 終了後ミーティング（支援サポーター、及び担当教員間でのリフレクション共有）、事

後調査（SD法、FAQ、FSA）

上記のプログラムは、高齢者理解、反エイジズム、エンパワメント、及びソーシャル・インクルージョンを要素として位置づけているが、それらを知識としてではなく、体験的に学ぶことが主目的である。そのため、本実験によって変容が見られたこれらの概念については、隠れたカリキュラム（Jackson, 1990；三島, 2015）として位置づけることにより、受講しやすい体験的学習であることを重視した。教育の社会実装化を意図し、地域社会で展開しやすい取り組みとして構成した

5. 結論

支援サポーター養成プログラムの作成を目的として、eAdS教室を実施した結果、支援サポーターのエイジズムの低下、エンパワメント視点の向上をもたらした。併せて、若年者、及び初学者にとって、AdSを介した高齢者交流は技術的にも心理的にも負担が少なかった。そのため、受講しやすい支援サポーター養成プログラムを作成し、多くの人にAdSに参画させることができれば、肯定的な高齢者観、対人援助観を社会に広げる機会になると考える。今後は、支援サポーター養成プログラムの実行を通して、支援者の成長・変化を追跡することを課題としたい。

謝 辞

本研究は、文部科学省「私立大学研究ブランディング助成事業」タイプA「地域共生のための対人援助システムの構築と効果に関する検証」の下で実施された研究成果の一部である。高齢者アダプテッド・スポーツ教室にご参加いただいた地域の皆様、支援サポーターとして取り組んでくれた学生に、深く感謝する。

参考文献

- 1) Burnes, D., Sheppard, C., Henderson Jr, C. R., Wassel, M., Cope, R., Barber, C., and Pillemer, K. (2019). Interventions to reduce ageism against older adults: a systematic review and meta-analysis. *Am. J. Public Health*, (0), e1-e9.
- 2) Butler, R. N. (1980). Ageism: A foreword. *J. Soc. Issues*, 36(2), 8-11.
- 3) Cox, EO., Parsons, RJ. (1994). "Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly" *International Thomson Publishing Inc.* /小松源助訳. (1997). 高齢者エンパワメントの基礎, 相川書房.
- 4) Jackson, P. W. (1990). *Life in classrooms. Teachers College Press.*
- 5) Kawano, T., Yamanishi, M., Bono, S., Moriki, G., Kaji, N and Yamasaki, M. (2018). Effect of adapted sports on profile of mood state in middle-aged and elderly individuals: A study on playing flying disc with university students. *Jpn J Adapted Phys Activ Educ*, 3(1), 2-10.
- 6) Kawano, T., Moriki, G., Bono, S., Kaji, N., Yamasaki, M., Muraki, S. (2020). Effects of the boccia as an adapted sport on the Mood states and Health-related quality of Life of elderly women in need of nursing care and assistance. *Jpn J Adapted Sport Science, in Press.*
- 7) Lamont, R. A., Swift, H. J., & Abrams, D. (2015). A review and meta-analysis of age-based stereotype threat: Negative stereotypes, not facts, do the damage. *Psychol. Aging*, 30(1), 180.
- 8) Palmore, E. (1977). Facts on aging: A short quiz. *Gerontologist*, 17(4), 315-320.
- 9) World Health Organization. (2015). World report on ageing and health. World Health Organization.
- 10) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, & 白井由里子. (1999). 看護学生の老人のイメージに関する研究: SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に. *老年看護学*, 4(1), 98-104.
- 11) 小島志緒里, 大河原玲奈, 加藤仁志, 鳥海亮, & 入山渉. (2017). 理学療法学科学生における認知症高齢者のイメージに関する縦断研究. In *理学療法学Supplement Vol. 44 Suppl. No. 2 (第52回日本理学療法学会抄録集)* (p. 1703). 公益社団法人日本理学療法士協会.
- 12) 河野喬, 加地信幸, 森木吾郎, 房野真也, 山崎昌廣. (2018). 高齢者のHealth-related Quality of Lifeに及ぼすアダプテッド・スポーツ実施の影響: 大学生と共に行ったインクルーシブ・ボッチャの実践. *人間健康学研究*, 1, 43-50.
- 13) 厚生労働省. (2003). 2015年の高齢者介護 - 高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて. URL: <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou/15kourei/3.html>. (2019.10.30確認)
- 14) 厚生労働省. (2015). 誰もが支え合う地域の構築に向けた福祉サービスの実現: 新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン. URL: <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/bijon.pdf> (2019.10.30確認)
- 15) 厚生労働省「我が事・丸ごと」地域共生社会実現本部. (2017). 「地域共生社会」の実現に向けて (当面の改革工程). URL: <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000150538.html> (2019.10.30確認)
- 16) 厚生労働省社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会. (2018). ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について. URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-hosho_224742.html (2019.10.30確認)
- 17) 鄭鍾和, 金英淑, 下垣光, 十束支朗, 洪淳慧, & 朴勝昊. (2000). 青少年の老人に対するイメージの日・韓比較研究: SD法による中学生・高校生の老人イメージ測定. *社会福祉学*, 41 (1), 163-174.
- 18) 新名正弥, & 中村律子. (2018). 高齢者福祉部門. *社会福祉学*, 59 (3), 177-191.
- 19) 須藤英一. (2017). 学生は高齢者施設での実習後, 高齢者への印象がどう変わるか~小アン

- ケート結果から～. 日本老年医学会雑誌, 54(4), 581-583.
- 20) 原田謙, 杉澤秀博, & 杉原陽子. (2004). 日本語版Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成; 都市部の若年男性におけるエイジズムの測定. 老年社会科学, 26(3), 308-319.
- 21) 藤原佳典, 渡辺直紀, 西真理子, 李相侖, 大場宏美, 吉田裕人, 佐久間尚子, 深谷太郎, 小宇佐陽子, 井上かず子, 天野秀紀, 内田勇人, 角野文彦, 新開省二. (2007). 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因“REPRINTS”高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. 日本公衆衛生雑誌, 54(9), 615-625.
- 22) 堀薫夫, & 大谷英子. (1995). 高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究: -the Facts on Aging Quizを用いて. 大阪教育大学紀要. IV, 教育科学, 44(1), 1-12.
- 23) 前田大作. (1979). 大都市青壮年の老人観および老親に対する責任意識. 社会老年学, (10), 3-22.
- 24) 三島亜紀子. (2015). ソーシャルワークのグローバル定義における多様性(ダイバーシティ)の尊重: 日本の社会福祉教育への「隠れたカリキュラム」視点導入の意義. ソーシャルワーク学会誌, 30, A 1-A12.
- 25) 吉田浩二, 辻麻由美, 原田文子, 大山祐介, 竹嶋純平, & 宮原春美. (2017). 看護学生のエイジズムに関する研究. 保健学研究, 30, 39-46.
- 26) Solomon, BB. (1976). Black empowerment: Social work in oppressed communities. Columbia University Press.
- 27) Rapp, CA. (1998). The strengths model: Case management with people suffering from severe and persistent mental illness. New York : Oxford University Press.
- 28) 小松源助. (1995). ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチの動向と課題. ソーシャルワーク研究, 21(2), 76-82.
- 29) 小松源助. (1996). ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開. ソーシャルワーク研究, 22(1), 46-55.